



松の弾き琴

むかしむかし、古港の近くに曲がりくねった松があった。幹の太さは丈余（3・3メートル）を越え、幹は虹のように屈曲し、枝は四方に垂れ十余間（約20メートル）以上広がり、葉は千年も経ったような深みのある色で、それが水に映っている風景は何とも言えぬ眺めであったという。

この松の川上に江月院というお寺があり更に離れた所に勉造という働き者の青年が住んでいた。

この勉造には鈍太という弟がいた。鈍太は毎日、のりくりらりと遊びまわっていたが勉造は特に叱りもせず鈍太のことなど知らぬ顔であった。

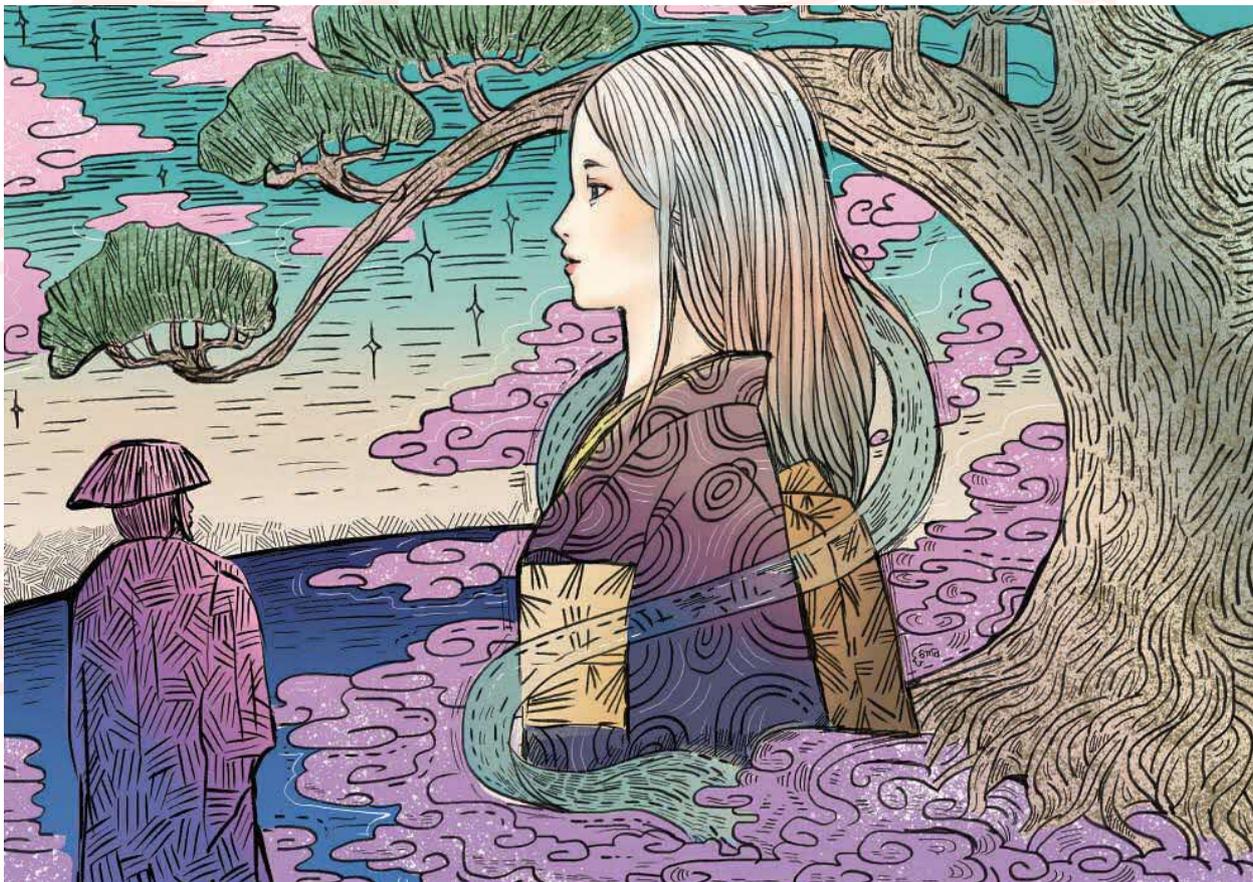
ある日、江月院の住職が勉造に嫁のなり手として松代を紹介した。松代は勉造と共に朝は夜の明けぬうちから畑仕事に行き、夕は星が出るころに帰る働き者であった。また、松代はときどき琴をひいて勉造をなぐさめた。しかし、松代は琴を弾くときは、一室に入って戸を閉め弾く姿を見せなかった。琴を弾くときは決して部屋を覗いてはいけないという固い約束がされていた。

そのうちに夫婦には玉のような男の子が生まれ松造と名付けられ幸せに過ごしていた。

それから数年の月日が経ったある日。

勉造の家では、毎年江月院の住職を招いてお茶会をすることにしていた。今年も例によって十五夜に住職を招いてお茶会を計画し、勉造は江月院へ向かっていた。

その留守のときのことである。松造は母に「おかあさん、





「琴弾いて」とねだった。松代は最初は断っていたが松造の再三の願いについて折れ、側にいた鈍太に松造を預け「琴を弾くのを見てはいけませんよ」と念を押して隣の部屋に入ってしまった。松代は部屋に入ったが胸さわぎがして弾く気がしない。なんとなく気がかりだったが松代は弾き始めた。松造はしばらく聞いているうちに眠ってしまった。鈍太は、「どれ、ちよつとのぞこうか。見るな見るなと言われると見たいものだ」と、抜き足差しすき間から琴の音が聞こえてくる部屋を覗いた。その途端、「うっ…苦しい…」

さようなら・・・というとき、松代は消えてしまった。松代の正体は曲がりくねった松の精であった。松造は夢から覚めると母はおらず、鈍太おじさんは倒れている。「お母さん、お母さん、おじさん、おじさん」といつても何の反応もない。松造は気もそぞろにぼう然としているとき、父の勉造が帰ってきた。「おお、松造どうしたのか」「遅いよ、お父さん。おじさんは倒れているし、お母さんはいない…お母さん…どこに行ってしまったの？」

松代はしおれきって部屋からでてきた。「ああ…胸さわぎがして弾く気になれなかったのはこういうことが起きる知らせであったのか。鈍太さんなぜ覗いてしまったのか…ああ…苦しい。我が子とこれで別れなくてはならないとは悲しいことだ。眠っている松造と話も出来ず別れることは辛い。ああ、そうだ。せめて形見に琴の音を裏の松に残しておこう。松造よ。お父様を後生大事に助けなさい。

勉造はその様子を見て、ことのすべてを理解した。「おお松造、さびしくなったのう。」と言いながら勉造を抱き寄せた。そのとき住職が来てこの有様に驚いたが、「どうしようもないことだ。」と言ってお経をよみ、松代と鈍太の冥福を祈り、翌日、鈍太の葬儀を丁寧にいった。このことがあってから、松の葉に潮風が触れるたびに美しい琴の音が聞こえるようになったという。そして誰と言うことなくこの松を「琴弾きの松」と呼ぶようになった。

それから数百年が経ち歌人の源重之が高鍋に立ち寄った際にこの松を見て

白波のよりくる糸ををにすげて

風にしらぶる琴弾きの松

という和歌を詠んだと言い伝えられている。その和歌は今もなおこの史跡の石碑に刻まれているがそこが松の根元という。※この松は、明治23年頃の暴風雨に枝を折られ遂に枯死したという。その後新たな松が植えられ、今では史跡として整備されている。

(採話：葦江地区 手塚隆吉)

平成3年3月発行たかなべむかしばなし第3集

「たかなべ伝・伝 Returns」は、当時、高鍋町の高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんが、高鍋町内の故老をたずね歩き、記録・作成した物語です。「Returns」では、全26話をご紹介してきました。高鍋町のホームページでは、「Returns」と併せて、当時発行した「たかなべ伝・伝」も掲載しておりますので、ぜひ、ご覧ください。

たかなべむかしばなしQRコード

